袈裟襷文銅鐸（中川滝峯七曲り出土）の概要

種　　別　有形文化財（考古資料）
名　　称　袈裟襷文銅鐸　（けさだすきもんどうたく）
員　　数　２口
ト　　書　中川滝峯七曲り出土
時　　代　弥生時代
所　在　地　浜松市北区細江町気賀 1015-1　浜松市姫街道と銅鐸の歴史民俗資料館
所　有　者　浜松市
所有者住所　浜松市中区元城町 103-2

解説文

浜松市北区細江町中川滝峯七曲り（滝峯の谷に含まれる）からは２口の銅鐸が出土している。発見順から１号鐸、２号鐸とする。ともに青銅製。

１号鐸は、残存高 68.0㎝（復元高 69.6㎝）、残存幅 35.5㎝（復元幅 39.0㎝）の近畿式銅鐸である。製作時期は弥生時代後期（突線鈕３式）である。昭和 41 年（1966）１月、造成工事中に出土した。片側の身下半は工事に伴い破損しているが、当該部分の破片が本体とは別に 13 片ある。

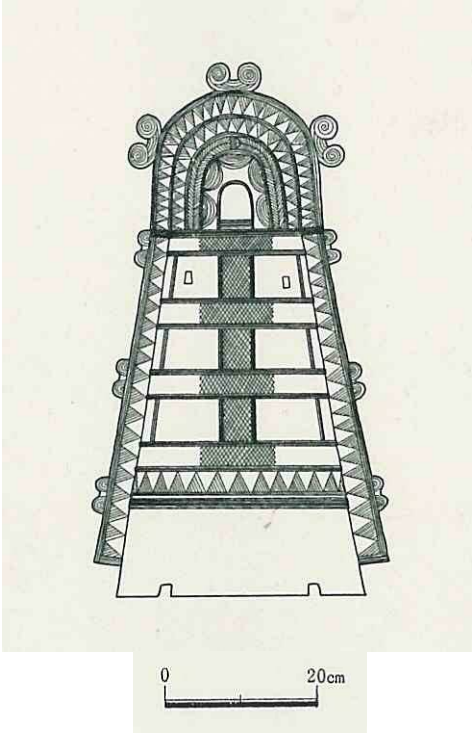
身には、斜格子文帯を用いた六区画の袈裟襷文が施され、その下に複線鋸歯文帯を置く。鰭には内向の複線鋸歯文を配して、２個一対の重弧文飾耳を片側に３箇所ずつ配している。鈕には、菱環の綾杉文を挟んで、外縁に２帯の複線鋸歯文を、内縁に５箇の重弧文を施し、３箇所に双頭渦文飾耳を施す。舞には円孔１対、身には方孔１対、裾には切込み１対の型持孔がある。

２号鐸は復元高 66.0㎝、復元幅 35.5㎝の三遠式銅鐸である。製作時期は弥生時代後期（突線鈕３式並行）である。昭和 41 年（1966）７月、１号鐸出土地から 30mほど離れた造成後の畑から 200 片以上に分かれて発見され、同年９月には出土地点の発掘調査が行われた。平成元年（1989）度には、保存処理が施され、破片を接合し、完形に復元された。なお、本体に接合されていない破片が 78 片ある。

身には、斜格子文帯と綾杉文帯を用いた六区画の袈裟襷文が施され、その下に複線鋸歯文帯を置く。鰭には内向の複線鋸歯文を配して、２個一対の小振りの重弧文飾耳を配している。鈕には、菱環の綾杉文を挟んで、外縁に２帯の複線鋸歯文を施す。内縁はそれぞれ模様が異なり、片面は６箇半の重弧文、反対の面は複線鋸歯文が配されている。

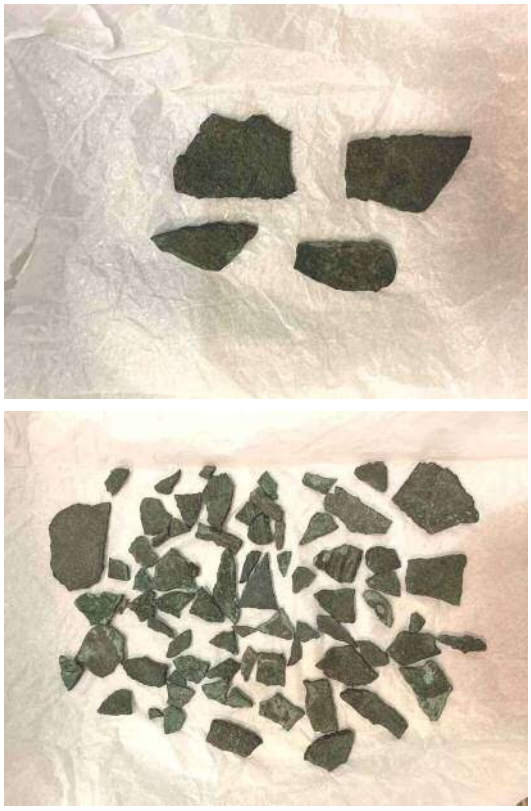
袈裟襷文銅鐸（七曲り１号鐸）の本体の現状

袈裟襷文銅鐸（七曲り１号鐸）の破片

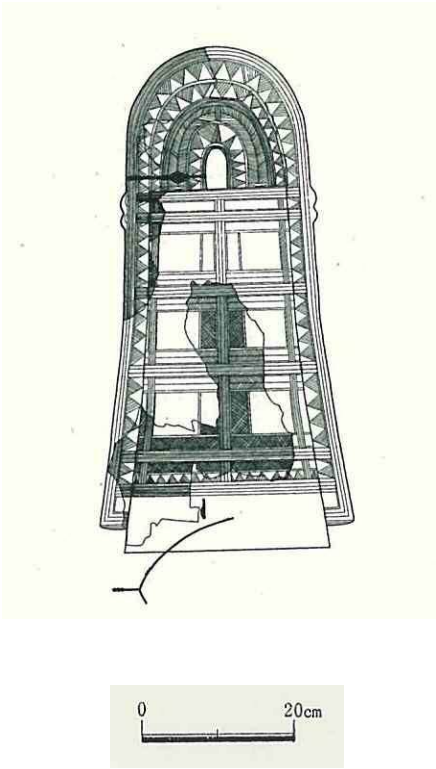


袈裟襷文銅鐸（七曲り１号鐸）の実測図

袈裟襷文銅鐸（七曲り２号鐸）の本体の現状



袈裟襷文銅鐸（七曲り２号鐸）の破片



袈裟襷文銅鐸（七曲り２号鐸）の実測図

袈裟襷文銅鐸（中川不動平出土）の概要

種　　別　有形文化財（考古資料）
名　　称　袈裟襷文銅鐸　（けさだすきもんどうたく）
員　　数　１口
ト　　書　中川不動平出土
時　　代　弥生時代
所　在　地　浜松市北区細江町気賀 1015-1　浜松市姫街道と銅鐸の歴史民俗資料館
所　有　者　浜松市
所有者住所　浜松市中区元城町 103-2

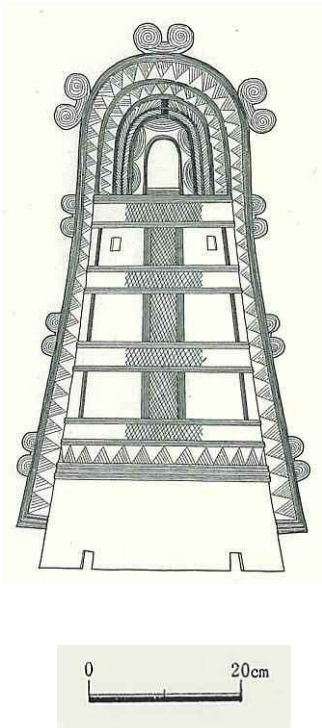
解説文

青銅製。本例は、高さ 72.3cm、残存幅 33.5cm（復元幅 38.2cm）の近畿式銅鐸である。製作時期は弥生時代後期（突線鈕３式）である。昭和 42 年（1967）１月、浜松市北区細江町中川不動平（滝峯の谷に含まれる）で行われた造成工事中に出土した。片側は出土時に破損しており、欠損部分の破片が本体とは別に 20 片ある。全体に破損時の歪みがあるが、全体形状をうかがうことに問題はない。

身には、斜格子文帯を用いた六区画の袈裟襷文が施され、その下に複線鋸歯文帯を置く。鰭には内向の複線鋸歯文を配して、２個一対の重弧文飾耳を片側に３箇所ずつ配している。鈕には、菱環の綾杉文を挟んで、外縁に２帯の複線鋸歯文を、内縁に５箇の重弧文を施し、３箇所に双頭渦文飾耳を施す。舞には円孔１対、身には方孔１対、裾には切込み１対の型持孔がある。

袈裟襷文銅鐸（不動平出土）の本体の現状

袈裟襷文銅鐸（不動平出土）の破片



袈裟襷文銅鐸（不動平出土）の実測図

袈裟襷文銅鐸３口について

浜松市北区細江町に、銅鐸が集中して出土する滝峯の谷と呼ばれる谷筋がある。今回、浜松市指定文化財として諮問する３口の袈裟襷文銅鐸（中川滝峯七曲り出土２口（近畿式と三遠式）、中川不動平出土１口（近畿式））は、いずれも、この谷から、昭和 41 年（1966）～昭和 42 年（1967）に出土したものである。

弥生時代の青銅器を代表する銅鐸は、中国四国地方から東海地方にかけて主に分布する。銅鐸分布圏の東限にあたる浜松市では、19 口が出土している（出土情報が確実な事例のみ）。形態が確認できる事例は、すべて袈裟襷文銅鐸である。いずれも弥生時代後期（約 2000～1900 年前）の突線鈕式に属し、近畿式と三遠式の二つのグループが混在している。なかでも、浜名湖北岸地域（浜松市北区）は、14 口の出土が確認できる銅鐸密集地であり、最も出土例が集中する滝峯の谷からは、本例を含め６口の銅鐸が出土している。

浜松市は浜名湖北岸地域において 1965 年以後に出土した７口の銅鐸を所有する（滝峯の谷出土品５口を含む）。いずれの事例も出土地が特定でき、直近の出土例は、発掘調査によって埋納状態を確認している（前原鐸：三遠式、滝峯才四郎谷鐸：近畿式）。浜名湖北岸の銅鐸出土地は、集落から離れた丘陵斜面にあたる傾向が強い。

近年、銅鐸の破片が発掘調査で出土するなど、銅鐸の再評価が進んでいるが、本例は、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の双方を含み、銅鐸祭祀や流通過程の実態をうかがう上で極めて重要な資料群といえる。

前原鐸出土状況

滝峯才四郎谷鐸出土状況

浜松市所蔵銅鐸

浜松市所有銅鐸一覧

番号	資料名	出土地	出土年	型式	銅鐸群	高さ	所蔵	指　定	備　考
1	猪久保	北区三ヶ日町	1965	突線鈕４式	近畿式	96.0	浜松市	県指定	
2	七曲り１号	北区細江町	1966	突線鈕３式	近畿式	現69.6	浜松市		破片あり
3	七曲り２号	北区細江町	1966	突線鈕３式	三遠式	65.0	浜松市		破片あり
4	不動平	北区細江町	1967	突線鈕３式	近畿式	65.1	浜松市		破片あり
5	穴ノ谷	北区細江町	1987	突線鈕３式	近畿式	65.2	浜松市	市指定	
6	前原	北区都田町	1987	突線鈕２式	三遠式	65.3	浜松市	県指定	埋納状態発掘
7	滝峯才四郎谷	北区細江町	1990	突線鈕２式	近畿式	65.4	浜松市	県指定	埋納状態発掘
	破片資料								
8	梶子	中区南伊場	1983	突線鈕３式	近畿式		浜松市		飾耳破片
9	松東１号	東区天龍川町	1990	突線鈕３式	近畿式		浜松市		飾耳破片
10	松東２号	東区天龍川町	2012	突線鈕２式	近畿式		浜松市		鈕破片

２・３・４・５・７は滝峯の谷からの出土品

1：猪久保

2：七曲り１号

3：七曲り２号

4：不動平

5：穴ノ谷

6：前原

7：滝峯才四郎谷

七曲り１号

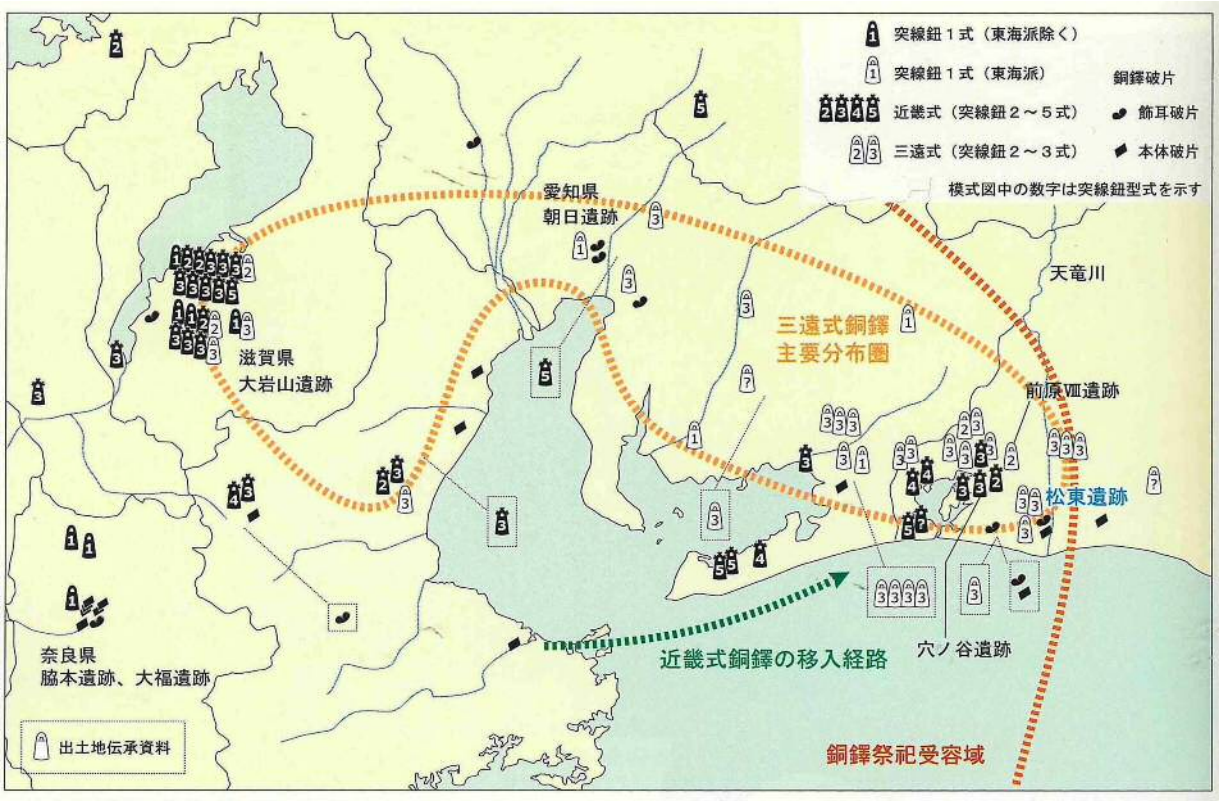
不動平

8：梶子

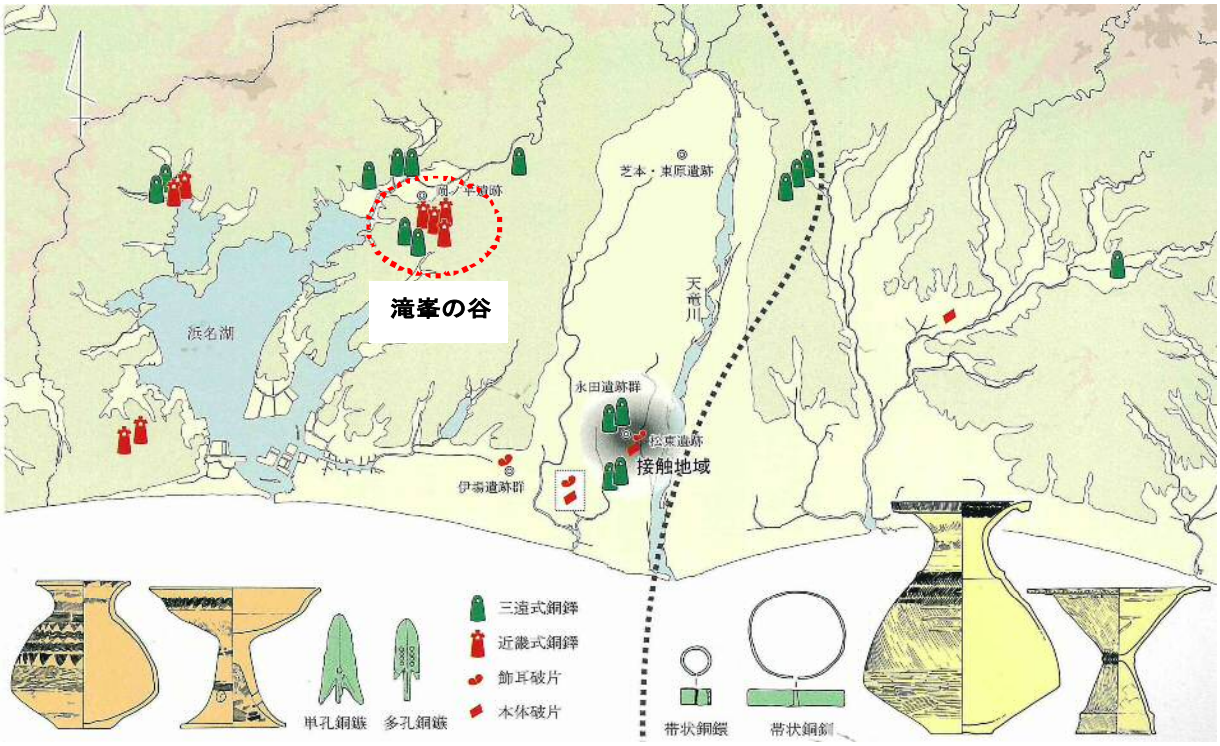
9：松東１号

10：松東２号

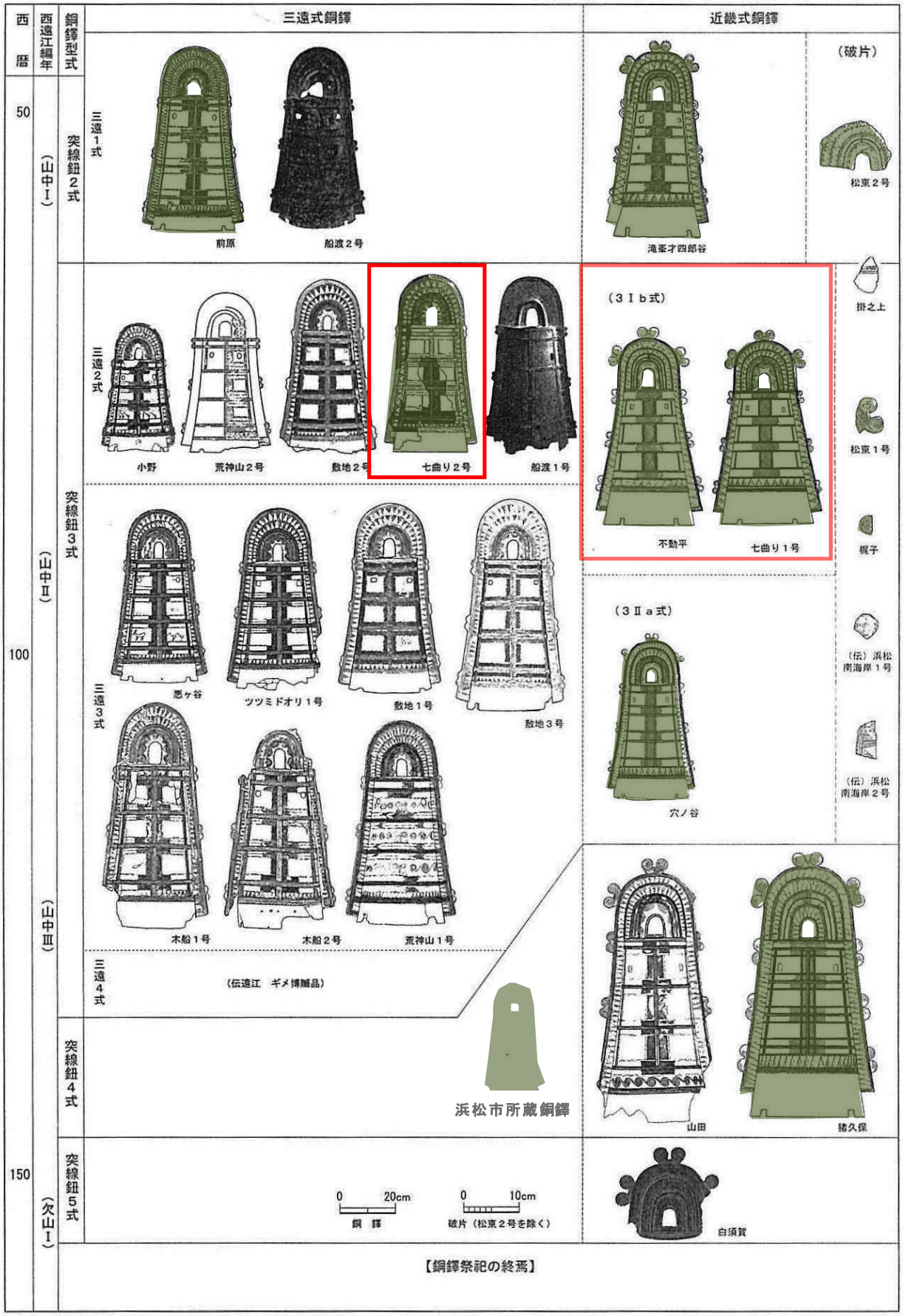
浜松市所有　突線袈裟襷文銅鐸



弥生時代後期における銅鐸の分布　重要文化財指定されている一括品としては、福井県気比（流水文銅鐸４口）、滋賀県大岩山（突線袈裟襷文銅鐸２口（東博）、突線袈裟襷文銅鐸２口（辰馬）、袈裟襷文銅鐸２口・突線袈裟襷文銅鐸７口・流水文銅鐸１口（野洲））、兵庫県桜ヶ丘（袈裟襷文銅鐸・流水文銅鐸８口）、島根県荒神谷（島根県荒神谷遺跡出土品６口）、島根県加茂岩倉（島根県加茂岩倉遺跡出土銅鐸 39 口）などがある。この他、発掘調査で埋納状態が明確されている銅鐸の指定品として、岡山県高塚遺跡、大阪府西浦遺跡、徳島県矢野遺跡、愛知県朝日遺跡の出土遺物がある。いずれも尾張以西の出土品であり、三河や遠江の指定物件はない。



弥生時代後期における土器様式圏と青銅器　弥生時代後期は、天竜川を境に土器様式が明確に異なる。銅鐸祭祀圏も土器様式が示す地域性と一致する。青銅器においても有孔銅鏃は銅鐸祭祀圏に、帯状釧は圏外に分布する関係が認められる。



遠江における銅鐸の変遷　　遠江で出土銅鐸は、突線鈕式に限定される。中でも三遠式の中心的な時期である突線鈕２式に集中する傾向があり、突線鈕４式以降は激減する。本資料群は、銅鐸祭祀の終焉を考える上でも重要である。